

芥川龍之介文学と映画：映画文化への文学の対応／ 文学作品の映画化

大石，富美

<https://hdl.handle.net/2324/4475214>

出版情報：九州大学，2020，博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 大石 富美

論 文 名 : 芥川龍之介文学と映画

——映画文化への文学の対応／文学作品の映画化

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本研究では芥川文学と映画の関係について、映画文化への文学の対応／文学作品の映画化という両側面から究明した。それにより、一九一〇年代以降の文化領域の中での芥川文学の位置を浮かび上がらせることを目指した。

第一部では、芥川龍之介の作品のうち、内容・形式の面で映画と密接にかかわっている四作を取り上げ考察した。

第一章では小説「片恋」(『文章世界』一九一七年一〇月)を取り上げた。「片恋」は活動写真という新しい文化を通して、見られる客体としての女性を見る主体へと逆転させた。さらに一九一〇年代から二〇年代にかけて映画が複製芸術として確立されていく中で次第に忘却されていった、活動写真のライブ体験としての側面を捉えた点も「片恋」の特徴といえる。

第二章では小説「影」(『改造』一九二〇年七月)を取り上げた。小説内映画によって描かれる分身現象は、当時の文学と映画の境界の曖昧な関係を比喩的に示す。当時の映画を観る体験の中には、字幕などの形で文字を読むことが多分に含まれていたのであり、「影」ではその体験を言語的に表現することが目指されていた。

第三章ではシナリオ「浅草公園」(『文藝春秋』一九二七年四月)を取り上げた。関東大震災から三年半後に発表されたこのシナリオは、一種の〈ポスト震災文学〉として一九二七年の社会の中に位置づけられる。また、「浅草公園」には芸術の比喩としての花が複数回登場するが、これらのイメージは晩年の芥川の自己像を描き出す機能も持たされていた。

第四章では、シナリオ「誘惑」(『改造』一九二七年四月)を取り上げた。最晩年の芥川が主に谷崎潤一郎との議論の中で展開した「話」らしい話のない小説」についての主張を整理し、芥川が目指したものを、当時の前衛芸術ともかかわる形で位置付けた。また、シナリオ内のセルフ・パロディ的な過去作の引用などが、「浅草公園」とも繋がり合いながら、当時の作家の自己像を示していることを論じた。さらに、「誘惑」の典拠の一つとなったと思われる実在の映画について指摘した。

第二部では、芥川龍之介の小説を原作とした映画について取り上げ、時代や文化圏を越えた原作の読み替えについて検討した。

第五章で取り上げた、芥川龍之介の小説「藪の中」(『新潮』一九二二年一月)は黒澤明監督の映画『羅生門』(一九五〇年)の原作となった作である。小説発表当時の陪審法についての議論との関連を指摘するとともに、周縁的な語りこそが〈真相〉の不可能性を露呈させていくという構造が、司法権力の閉鎖性に対する批判として機能していたことを論じた。

第六章では映画『羅生門』と、そのハリウッド・リメイク作『暴行』(マーティン・リット監督、

一九六四年) を取り上げ、異なる歴史的条件下で行われるアダプテーションのプロセスを描出した。映画『羅生門』は複数の芥川作品のモチーフを引き継ぎながら戦後日本社会の状況と交錯させ、多層的な象徴性を付与した。それに対し『暴行』は、『羅生門』を戦後日本という特定の文脈から切り離し「普遍性」を抽出する操作を加えつつも、『羅生門』の持っていた問題意識を引き継ぎアメリカ社会の問題と絡めて描き出していた。

第七章では、小説「南京の基督」(『中央公論』一九二〇年七月) を原作とした、香港・日本合作映画『南京の基督』(トニー・オウ監督、一九九五年一二月) を取り上げた。映画の主人公に作者・芥川龍之介のイメージが投影されたことは、映画が制作・公開された一九九五年の社会において映画が持ち得た政治的意味を隠蔽する機能を果たしていた。また映画との対比により、芥川龍之介の一九二〇年代の中国表象の特色が、コミュニケーションの断絶と視覚的観察を通し、中国の革命期前夜の様相を伝えることにあったことを明らかにした。

本研究全体を通し、芥川龍之介の作品の同時代の中での位置付けを行った。それを通し、映画に対する芥川のスタンスが変化していく様相を明らかにした。さらに、芥川作品を軸に、時代や文化圏を跨いだアダプテーションの実践について記述した。デフォルメされた作家のイメージという観点から、芥川文学の現在の受容についても示した。芥川龍之介文学を取り上げた本稿の成果は、映画と文学の相関についての多角的・歴史的探究に繋がるものである。